

海士町、自分を省みて

荒生 菜々恵

私はおきひやくプロジェクトに今回初めて参加した。最初海士町に行くまで、聞き書きがどういったものなのか、海士町でのフィールドワークがどういったものになるのかを深く考えていなかった。というよりはあまり想像できていなかったのかもしれない。離島というものに興味があり、島の生活を見たいという漠然とした思いでこの研修に参加した自分だったが、そういったもの以外にも得るものはたくさんあった。

海士町での研修の中で自分の「学ぶ姿勢」について考えるようになった。せっかく参加したのだからそこから学べるものが多い方が良いに決まっている。しかし受動的な「学び」で満足していけない。もっと積極的な、能動的な「学び」が必要なのだと感じ、また自分にはそういった部分が欠けていたと感じた。巡の環さんから、応援団の方々から、語り手さんからいろいろな話を聞いた。自分の知らない話を聞いて、自分が考えたことのないような考えを聞いて、まちがいなくそれは自分にとってプラスになった。だが私はそこで止まってしまふ。そういった話を聞いて自分は何を思い、考えたのか、そこから自分が学び取ったものは何なのかということ自分の言葉で発信することをしない。もともと私はそういったことが苦手であり、そのことを自覚している。気づいてはいたが今まで無視してきた。しかし班での話し合い、巡の環さんが用意してくださった様々なワークショップで、自分の考えを言える人、自分が何を得たのか言える人を見て、もっと自分で考えて、せっかく貴重な話を聞いたのだからそこから最大限のものを得られるように、もっと学ぶことに対して貪欲な姿勢を持つべきだと反省した。

聞き書きについても当初はよくわかっていなかったが、ただ質問して話を聞いてまた質問して、ではなく、話す語り手さんの空気感、雰囲気、仕草や間などにも注意することが大切だと思った。それを今後の編集作業で文章にどう表すのか考えていきたいと思う。また聞いているとき、この質問をしたら話がそれるのではなどと考えたり、緊張したりしたので、流れに任せてもっと自然に素直に聞くことができたらよかった。

改めて感想を書いてみると反省点ばかり出てきた。しかし後悔ばかりではなく確かに得たものもあった。食べ物も美味しく、自然も豊かで、何よりもそこで生活している人々が力強く輝いていた。自分だったらこんな風に地域のために行動することができるだろうかと考えた。今回の研修でたくさんの人たちと交流してお世話になった感謝の気持ちを忘れたくない。ありがとうございました。

第2のふるさと海士

井上 歩

人生で、初めてのフィールドワーク。初めての聞き書き。初めての海士町訪問。「はじめて」だらけだった6日間はとても刺激的で、決して忘れられないものになった。

名古屋から新幹線に乗り、途中岡山で特急に乗り換えて、フェリーに乗り、半日かけてやっと辿り着く海士町。名古屋から遠く離れた離島にはじめて降り立って感じたことは、不思議なことに、海士町が小さい頃から慣れ親しんでいた町のように感じられることである。何がそう感じさせるのか分からないが、豊かな自然と、旅人たちをまるで昔から知っていたかのように受け入れてくださる島の人々のあたたかさに触れ、第2の故郷ができたように感じた。

「ないものはない」。離島である海士町は、都会のように便利な物に溢れているわけではないが、自然や郷土の恵みは豊富で、暮らしに必要なものは充分にある。海士町に関する書籍の中で何度も読んだことのある言葉だが、海士町を訪れてはじめてその意味を体感することができた。コンビニエンスストアやファストフード店はたしかに便利だが、それに依存することによって見えなくなってしまうことがあるように感じた。海士で生活し、またそこに暮らす方々のお話を聞くうちに、真の「ゆたかさ」とは何か、「人間らしく」生きるとはどういうことなのか、を考えるようになった。そのはっきりとした答えはまだわからないが、海士から得たヒントをもとに、これからの人生で常に考えていきたいと思う。

この実習を通して人のあたたかさに触れ、それに感謝することの大切さを改めて強く感じた。私たち学生だけでは決して行うことのできない実習である。その感謝の気持ちを伝えるためにも、今後の編集作業に全力で取り組み、たくさんの気づきをくれた海士に少しでも恩返しができたらと思う。また来年も、海士に行きたい。

人と人との関わり合い

岩坂 真帆

私にとって今回の研修は初めての聞き書きでした。参加のきっかけは佐野先生です。私の祖父の話をしたところ、聞き書きという手法を用いて話を聞く取り組みがあるという事を教えてくださり、以前から興味があった「本をつくる」という作業にも携われるということで参加を決めました。研修前、分からないことだらけの中で少しでも多くのことを学んで帰れたらと思っていました。しかし実際には想像以上の貴重な体験があり、参加を後押しして下さった方々には本当に感謝しています。海士で出会った人、自然、すべての体験が今後の私の人生において大切な糧になると感じました。

海士で初めて出会ったものは沢山あります。どれをとってもびっくりするくらい美味しく思わず食べ過ぎてしまったお料理、真っ暗だけれど静かで美しい夜の海、自然に囲まれているから不思議ときたないと感じなかった雨……。しかし最も印象に残ったのは、そこにいる人の姿でした。巡の環の方や応援団の方、そして私がお話を伺った榊原均さん。どの方もそれぞれ生き方は違うけれど、交流する中で「人と人が関わり合って生きていく」ことを学ぶことができました。

海士に来る前、私は「働く」という事を漠然と「生きていくためのお金を得る手段」と考えてきました。それは大学、アルバイト、家といった限られた世界の中で私が見た働く人の姿でした。しかし海士で働く巡の環の方や榊原さんを見て、「働く」とは「誰かのために行動すること」であり、その対価にお金があると考えようになりました。巡の環の方は島の未来のために、榊原さんは島民の健康のために、それぞれが自分の方法で他者を思いやっていることが仕事と直結している。そういう人は名古屋の身の周りにもきっといたでしょうが、それを直に感じることは初めてのことでした。

応援団の方たちも交えて行ったワークショップでは、皆さんの積極的な姿勢に驚かされました。私はどちらかというと消極的で、話し合いの場でも発言することが得意ではありません。考えていることを分かりやすく伝えることが得意ではないと感じているからです。しかし応援団の方や一橋大、名市大の学生たちの、積極的に他者と関わり自分の糧にしようとする姿勢を見て、「学んだことはアウトプットして他者と共有することで初めて整理され、自分の学びになる」という事に気づけました。

研修を通して出会えた海士の人たち、周りの学生や先生方に感謝し、今回学べたことを忘れず大切にしていきたいと思いました。

春から、身を立てていくにあたり

上田 佳奈

自分について語るのは、とことん苦手である。自分がどういう人間か、考察し分析することは億劫ではないが、意見発表となると減法だめで、気が進まない。それにも関わらず懲りずに私は、盛んな意見交換が求められる場、2度目にして最後の聞き書き実習に参加した。昨年との大きな違いは、就職先が決まり、春から自分で身を立てていく、その覚悟とプレッシャーが常に私の内側に潜んでいることである。その2つを以てして、この聞き書きに限定せず実習全体を通して何を考えたか、なんとか記していこうと思う。

まず私にとって、この実習に参加すること自体が一大決心であり、挑戦であった。その部分があまりにも大きい。最高学年にして実習経験者、昨年までこの実習を牽引し築きあげてこられた諸先輩方の跡を継ぐべき立場にあることは理解していながら、先輩方があまりに偉大で、その勇気は簡単には生まれなかった。それでも参加しよう、しなくてはならないと決めたのは、実習にただ参加するのではなくそれを1から作り上げる過程とそこに伴う苦勞が、社会人になる前の私を成長させると考えたこと、そして何より、先輩方の築き上げてきた実習の足並みを止めてはならないと、昨年の実習以来1年間、感じ続けていたためである。このようにどちらかと言えば私個人の心情とはあまり関係のない、外的要因に突き動かされて参加を決めたわけだが、結論から言うと、編集作業が本格的に始まる前の現段階としては、以上の2つの参加目的は見事に達成されたと言える。しかしながらまだ実習は終了しておらず、始まったばかりであるため、最終的に達成されたかどうか評価し振り返るのは、実習が終わる冬まで待とうと思う。

初めに、自分で身を立てていく覚悟とプレッシャーがある、と書いた。具体的にそれらは、語り手さんのお話を伺う際、昨年までの「働くとはどういうことか」という疑問ではなく、「自分は今後どう生きるべきか」という疑問を主軸にその場に臨ませる形で私に作用した。その結果、昨年の経験に基づき考え抜いて選択した「かせぎ」の方法が、今年の経験で正しかったと思うことができた。そう思えたのは、聞き書きの数時間だけでなく、実習2度目だからこそ味わえた、海士の人々との再会の喜びや、先生や応援団、2つの大学の学生たちと寝食を共にし、会話や議論を交わす楽しさによるところも大きい。春から始まる慣れない土地での生活、想像している以上に大変であろう仕事、どれをとっても私にとっては大きな壁であるが、昨年、そして今年の実習を通しての財産は、どのような形であれ、まちがいなく私の味方になる、そんな気がしている。

つながり、の答えを求めて

加藤 千鶴

1年という長期休暇を得て、私の大学生活は海士町にて再開した。フィールドワーク、聞き書きというあまりなじみのない言葉に戸惑いつつも、充実した6日間を過ごすことができたと思う。大学で机にかじりつき、黒板を見ながら受ける授業とは違う、新鮮な学びの場が海士にはあった。

そもそも、私にとって海士という町は地図上に存在する小さな絵にすぎなかった。しかしながら、今から約1年前、初めて発行された『海士伝』を読み通すことによって、海士町は興味深い、関心を寄せる場所へと変化した。本に綴られた言葉から察するに、海士という町は、「ひと」との「つながり」が存在する場所らしい。それが本を読み終えた私の感想である。正直なところ、私は「つながり」という言葉が苦手であった。言葉に得手不得手を感じるのもおかしな話だが、多分、私は「つながり」という言葉が指し示す何かを知らないのである。海外にて出会った友人とまめにコンタクトをとることはないし、親友と呼べる相手や実の家族とすらまったく連絡をとらないという有様だ。こんな私につながりの何たるかを知り得るすべなどないことは至極納得できるのだが、決して私がひととのつながりを断って生きているという訳ではない。では、つながりとは何なのか。自分の住んでいる場所の魅力を、「ひと」や「つながり」と答えられる住民の住む町とはどんなところなのか。私の知らない何かを知ることができるような予感と期待が、私にこの実習参加を決めさせたのだ。

今回私にお話をしてくださった語り手、榊原均さんは海士で医者として働いている方だった。24時間、すべての時間をお医者様として過ごしている榊原さんもまた、海士の魅力を「ひと」と語ってくださった。医者、患者の垣根を越え、海士にすむ「ひと」と「ひと」として患者さんに向き合う榊原さんにとって、ひととのつながりは確かに存在するものであるらしい。聞き書きを通して榊原さんが語ってくれた話や、海士で生活する人々は、私につながりの存在を証明してみせてくれたように感じる。残念ながら、この言葉が指し示す何かは未だにわからないが、海士町にある人のぬくもりや、また会いたいと思える安心感が、新たなつながりを生んでいくのだろう。私もそこにこの問いの答えを見つけられるのかもしれない。

本実習での経験と思いが込められた新しい『海士伝』にもまた、「ひと」と「つながり」ということばが多く綴られるだろう。ここに綴られることばたちが、沢山のひととひととを結びつけてくれることを、心から願っている。

海士を動かし、維持していく

神谷 総一郎

6日間の海士町でのフィールドワークを終えて、月並みな表現ではありますが、本当に学びの多い充実した時間を過ごすことができたと思いました。巡の環や関係者の方々から、この海士町についての歴史や今の課題についてお話を伺ったのはもちろん、1人の人間として学ぶことも多々ありました。たくさんのお話を伺う中で特に気になったのが、海士町は日本のタグボートとなるかもしれないということでした。「海士町の規模は小さいけれども、行動を起こせばその分すぐに形になって影響が出て、やったことがよい影響を及ぼしたのかどうかということがすぐに判明していく。そして、その施策をほかの同じような課題を抱えている日本の地域で実施することで、海士町が模範となってほかの地域を引っ張っていくことができる」ということを聞き、海士町は日本を導いていくリーダーシップを持つ素晴らしい地域なのだと感銘を受けたことを鮮明に覚えています。

ほかにも、もちろん海士町では学びを得ただけではなく、自由時間の間に散歩や観光をして、宿泊先の近くにお住まいの島民の方と世間話をしたり、底が見え透くぐらいきれいな海を眺めながら物思いにふけったりなど、貴重な体験をさせていただきました。特に、印象深かったのが、聞き書きをさせていただいた浜見敏明さん、優子さんご夫婦への聞き書きの際に、海士町がどうなっていてほしいかという質問に対して、今の状態が「維持」されていてほしいという言葉を目にしたことでした。私的な想いを言えば、海士に来て生活をするうちに、愛着を感じ始め、Uターン・Iターンの方も年々多くなっていくほど海士町はとても良いところで、欲を言えばもっと発展してもらってこの良さをいろんな人に感じてもらいたいと思っていました。ですが、浜見さんご夫婦に聞き書きを行い、浜見さんご夫婦が語る海士の現状をお聞きし、「維持」という言葉をきちんと理解しているからこそ言える言葉なのではないのかと後々感じました。そのとき、僕は「維持」という言葉の重みをより強く感じる一方で、その維持に貢献したいと思えました。

プロジェクトに参加する中で、巡の環のみなさまをはじめ、聞き書きをさせていただいた浜見さんご夫婦、宿泊先でお世話になった方々など、たくさんの方の協力でこのプロジェクトが成り立っているのだと肌身に感じました。短い間でしたが、海士にいる間にお世話になりました。また海士に戻ってきて、お会いすることを楽しみにしています。

私自身の糧として

鈴木 夏実

私は当初、記事を書くためにやってきた記者の気持ちで海士町にやってきた。海士町やそこに住む人はこんなにも素晴らしいと完全に第三者のまなざしで海士町を見ていた。しかし、そうやって自分の周りの、知らない景色、人々と触れ合っているうちに、むしろ自分自身を見つめ返すようになった。

私がこのプロジェクトに参加した理由は、聞き書き及びその出版に至るまでの編集作業に携わってみたいと感じたほかに、人口減少の危機からIターン増加の成功例、モデルケースとして輝く海士町に興味を湧いたという理由もある。私の出身は浜松であり、人口減少、産業衰退が危ぶまれる典型的な地方都市である。地方行政も決してその状態を放置しているわけではないが、皆ぼんやりと諦めている、そのような雰囲気が蔓延していた。

そんな地域を故郷に持つ私は最初、ただただ海士町を羨ましく感じるのみであったのが、次第にどうにかここで得た経験を私自身と私の故郷の糧にならないかと考えるようになった。何故海士町はこうなのに私の地元は違うのか、地元の為に、私自身の為に、何ができるのか、そう考えているうちに、私は記者から海士人ならぬ浜松人となった。

私たちの班は保野昌和さん、ひとみさんご夫婦に聞き書きを行ったが、お二人は互いを尊敬し合い、感謝の気持ちを忘れないという大変素晴らしい関係を持っていた。そのことに関しても、最初はその理想的な家族関係に単純に感動していたが、これも私の糧になり得るのだと気付いた。私に足りないもの、互いの言葉を素直に受け止められる「吸収力」と周囲のあらゆることに感謝を忘れない「感謝の心」を彼らは持っていた。そしてそれは、私の努力次第でこれから先必ず得られると信じ、実践している。

外のものをいいな、羨ましいと眺めているのではなく、それを取り込み、自らの糧としてやろう、そしてその糧をいつか自分の故郷にも埋め、育て、根付かせてやろうという貪欲な態度で臨むようになったのだ。海士町やそこに住む人々との触れ合いの経験は間違いなく素晴らしいものだった。しかしその場所や人の魅力は、決して島内のみ限定される、海士町特有のものでは決してない。私はここで得たものを単なる思い出話に留めず、私自身の力として周囲に伝播し、根付き、そしてさらに広がっていく、そんな普遍的なものにしていきたい。

ひとのちから

田中 あすか

昨年、おきひやくプロジェクト初参加で初めて訪れた海士での5日間は、後々、夢かど疑いたくなるほど充実して楽しかった。それが、2回目で同じ場所同じ活動となると、「もういいや」と気持ちが冷めるかもしれないという不安を持って海士へ向かった。

2回目の明屋海岸。昨年の「きれい」という感情ではなく、ここから海士がかたちづくられ、海士の風景が作りだせたのかと感慨をうけた。自分でも予想外な感覚で、聞き書きを終え、また現地に行くことで感じたそれは、聞き書きの威力かもしれない。しっかりと生きるひとの言葉が、その生きる場所にむすびついて記憶にのこる。聞き書きを読んで、現地に行って、あのひとが生きる場所はここかと感動できるなんて、素敵なことだ。聞き書きをする側として、海士の自然や語り手さんに思いを寄せられるという特権もある。

台風の海士を体感できたのも新鮮だった。巡の環の石坂達さんの「ちゃんと海が台風の色をしているね」という言葉とちやいろい海。海に台風の色があるとは知らなかったし、それをそうと捉えられる感覚がうらやましかった。また、マリポートホテル海士のロビーから海面を見ていると、強い風が吹く度に模様ができていた。私は「風がかかるよう」という表現が限界だったが、海士のひとはもっとびったりな言葉をもっているかもしれない。海に親しみのない私には、海をあらわす言葉も少ない。2回目といっても、知らないこと、気づかないことも多かった。

結果、昨年とは違う楽しさを得ることができたが、海士での最終日、振り返りの時間には言葉にできなかった、楽しさとは別に何かひっかかる感覚も残っていた。考えてみるとそれは、「この楽しさは私がおきひやくプロジェクトの一員として、多くの方々にもてなしていただいた環境から得たもので、それだけで海士を把握している」という違和感だった。私のなかで海士は、学生仲間、先生方、応援団の方々、海士の方々、と本当に素晴らしいひとたちとの素晴らしい経験のなかで認識され、記憶されている。その経験も、海士に根差す巡の環の方々によるコーディネートに、海士の方々の受け入れ姿勢、先輩方や先生方が築いている信頼やネットワークに支えられている。これらの温かさを感じたから、楽しく幸せといえたのだろう。しかし、それは特別な環境だ。

もてなしていただいた環境での海士、夏の数日間だけ。そうではない海士をみてみたい。「もういいや」どころではなくなった。それほどの包容力をみせてくれる海士という場所、おきひやくに関わるみなさんに魅了されてたまらない。

長期的視野をもつこと

林 あかね

隠岐の100人の個人史を、20年かけて聞き書こう、という「おきひやく」プロジェクト（以下、おきひやく）の実施は、今年度が3年目である。

今年度、わたしは、神楽師である石塚芳秀さんに聞き書きをした。石塚さんとの聞き書き中に、昨年の聞き書きに登場した言葉の意味をやっと理解した。ここでは、それを経験して得たことを書きとめておきたい。

昨年度は、海士町長である山内道雄さんに聞き書きをした。石塚さんは、ご退職前、教育委員会教育次長として、ご活躍された。共に町政にたずさわってきた石塚さんが、町長としての山内さんの尊敬している点を語ってくださった。それは、わたしが、昨年の聞き書きを終えてから、「すっきりとは理解しにくい」と気になりつづけていたエピソードであった。「山内さんが謙遜して言葉をえらんだため、真相が見えにくいのだろう」と思っていたが、石塚さんの語りから、そうではなかったことを知った。おふたりの語りを編みあわせることで、それぞれの語りが見えやすくなり、町役場全体の企画力や推進力のようなものを理解することができた。思いがけない1年越しの理解だった。

この経験は、おきひやくの目指すことを、わたしなりに理解できたときでもあった。「100人の語りを重ねていくことで、わたしたちを含め多くの人びとを惹きつける海士町の『何か』を知ることができるかもしれない」と、先生や先輩方から何度も聞いてきたが、100という数字をかかげる壮大なプロジェクトが何をもちこたえるのか、わたしはわかっていなかったと思う。個人史は、単体でも学ぶことの多い読み物であるが、今回、数多くの個人史を編みあわせて読むことは、ひとつの個人史の理解を奥深くすると知った。このプロジェクトと100人構想の真の魅力を3年目にして胸におとすことができたと思う。

受け売りであれば他の人に説明できてしまうくらい何度も教わってきたことでも、すぐに理解できることばかりではない。1年後に理解できることや、3年かけて本当の意味がわかることもある、この経験から学んだ。20年先を見すえたおきひやくは、今すぐにわからないことが多くとも、継続していれば、だんだんと雲間が晴れていくようにわかっていくこともある、と教えてくれた。これにより、わたしは、ただ緊張していた会社員として働くことに、覚悟ができた。考えすぎるところが短所と言われるわたしであるが、「後からわかることもある。あれこれ考えすぎず、とにかくやってみよう」と、いい意味でわりきることができた。

海士町滞在中には、海士町民、応援団の方々、大学の先生方という、多方面で活躍されている方々から、それぞれの生き方についてお話を聞く機会が多くあった。刺激を受け、わたしも自ずと自分の生き方について考えた。この6日間を、今後の人生で、何度も思い出したい。そして、「こんな宝物も得ていたのだな」と、今気づいていないその価値を、これからもっと知っていきたい。

海士のサムライと出会った日々

水野 直美

私は今年、「フィールドワーク」への興味からこの海士での聞き書きに挑戦した。海士という土地に行って、その土地の人にじっくり話を聞くというこの聞き書きを通じて、机の上で学ぶだけではなく、実際に現地を訪問し、現地の人々の生の声や、その土地に根付く文化を見聞きしたいと思ったのである。

海士に行って、実際に多くのお話を聞くことができた。その中でも一番印象に残っているものを2点挙げたい。

1点目は、「くらし・しごと・かせぎ」である。自分の周りに対して責任を負い、コミュニティを良いものにしていく、それも仕事のひとつであるという巡の環の阿部裕志さんのお話が、私の胸に突き刺さった。今まで、自分の生活スタイルがいったいどのようなものなのか、どのようなものにしていきたいのかについて、考えたことはなかった。自身の生活スタイルは「当たり前」のものとしてしみついていて、それらを見直す機会は今までになかったのである。もし、海士へ行って、このことばを聞くことがなければ、当たり前のように毎日を過ごし、働き、歳をとっていくことになっていただろう。22歳の誕生日を前に、人として、地域の中で生き、対価をもらうという暮らし方を知ることができたのは私にとって財産となった。2点目は、今回聞き書きをさせていただいた石塚芳秀さんのおことばで、「なくしたものはもどらない」ということばである。これは今後自分が新しいものに挑戦しようとしたとき、自分に問い聞かせたいと思う。目新しいものばかりを良しとするのではなく、今後新しいものを作り出そうとするとき、自立した生活を送るとき、自分が一番大切にしたいもの、今まで大切にしてきたものを継続して大切にしていきたいと思った。自分が家族から与えてもらったものや、親から教わったことは数多くあるが、それらが自分にどのような意味を持つのか、今まで考えてきたようで考えてこなかった。海士で聞き書きをしてこのようなことを考えるのは、もしかしたら相応ではないかもしれないが、私にとっては大きな意味を持っていたと思う。

今後、編集作業を終えて『海士伝3』出版し、多くの人に海士の魅力を伝えていくことが私たちおきひやくプロジェクトが担っている使命である。厚かましいかもしれないが、多くのことを与えてくれた海士のサムライたちへの恩返しだと思って、今後は今までに経験したことのない責任あるこの作業と全力で向き合っていきたい。

紡ぎ続ける

宮崎 舞

私にとって今回の海士は2回目の訪問であった。まだ2回目であるにも関わらず、海士に知人がいるということが嬉しく、また帰ってきたという雰囲気が不思議であったのが忘れられない。前回の5日間から、おきひやくを20年間引き継いでいくためには、次の人たちにバトンを渡さなければいけないということを感じていた。そのため、今回の海士では、チームを意識し、「楽しむ」ということを自身のキーワードにしていた。自身のことでいっぱいいっぱい、消極的であった去年に比べ、今回は巡の環の高橋亜紗子さんをはじめ、応援団として海士を訪れた方々とたくさん語り合った。そんな中で、チームの全員で考えなどを共有したことによって、一体感を持てたのではないかと考えている。

また、今回私が聞き書きをする保野昌和さん、ひとみさんご夫婦の柔軟さにも驚かされ、昨年引き続き学ぶことが多かった。ご夫婦への聞き書きは初めての試みであったため、内心どうなるのかという不安が少しあったが、すぐに不安は消え、話に聞き入っている自分がいた。その中で、「今日は明日のため」、「楽しんでやらんと」という言葉が深く印象に残っている。今回の私自身の海士でのキーワードと、ご夫婦の話のキーワードが一緒であったため、自分に自信を持つことが出来た。同時に、「楽しむ」という意識の大事さをさらに考えさせられた。のちの編集作業において、ご夫婦の雰囲気までも読者に伝えることができるように奮闘したいと思う。

今回の海士での滞在は、台風の影響により当初予定していた5日間から延泊し、6日間ということになった。一橋大学との合同であるということから、参加人数も多く、度重なる予定の変更などにより、様々な人に迷惑をかけたはずである。しかし、誰もが私たちのことを心配し、快適に過ごせるようにと配慮してくださったことに、感謝の気持ちでいっぱいである。

誰かの人生に触れることを許されるこの聞き書きは、私たち参加者や語り手さんたちだけで成り立つものではない。これからはじまる長い編集作業においても、感謝の気持ちや楽しむことを忘れず、取り組んでいきたい。

今だからこそ

村井 佳奈

海士町での聞き書き実習は、今回で3度目である。今年は3年目にしてはじめて、台風の影響によって大幅な日程変更を余儀なくされるという事態も起こったものの、非常に濃密で充実した6日間を過ごすことができた。今回の実習のなかでわたしがとくに強く感じたのは、そのとき、その場だからこそ感じられること、味わえるもの、つくりあげられるものがあるということである。

わたしたちの班がお話を伺った榊原均さんは、海士で医師をしている方であった。榊原さんは、たとえ自分が休暇のときであっても、救急車の音が聞こえてくれば、どうしても気になって仕方がなく、電話でどこの誰の具合が悪いのかと確認をとったり、場合によっては指示をしたりもするそうだ。このようにするのは別に苦ではなくて、自分がいない間に患者に何か起こってしまうほうがショックなのだとお話ししてくださった。自分の生活から医療が常に切り離せないものになっていることについても、苦ではないしそういう医者がいてもいいんじゃないとおっしゃっていた。

わたしは、大学卒業を目前にし、これから社会に出てどう生きていこうかと考えるようになったが、自分の身の周りの人々からの影響もあってか、仕事をするのは、かせぐため、すなわち生活を成り立たせていくためだと思っていた節があった。なんとなくこのように考えるようになっていたわたしにとって、ただかせぐというためだけではない働きかた、ひとつのことに對して全身全霊を注ぐ生きかたがあるとお話から感じられたということは、とても刺激的なことであった。これは今だからこそ、とくに感じるところが大きかったのだと思うし、今だから感じられたことをこれからも大切にしていきたい。

また、3年連続して聞き書き実習に参加してきた今年だからこそしみじみと思うこともあった。聞き書きは当然のことながら、毎回語り手の方も違えば、聞き手となるメンバーも異なる。本当にそのとき、その場でしかつくりあげられないものである。ゆえに何回挑戦しても、同じということはなく、本当に難しいと感じるし、慣れてしまうということはない。しかし、決して同じものがない、生きた対話であるからこそ、事前の準備や予想をはるかに超える何かを得られるのも事実であり、予想外が起こるからこそ、聞き書きはおもしろいものなのだと今回改めて感じた。

このおきひやくプロジェクトはまだ3年目をむかえたところである。これから先のそれぞれの年でどんなメンバーが登場し、どんなストーリーがつくりあげられていくのか楽しみにみていきたい。

小さな変化

義原 愛子

私は今回初めておきひやくプロジェクトに参加し、海士という、今までに耳にしたことのない島に訪問した。参加のきっかけは、大学 2 年になり、様々なガイダンスを受ける中で、このプロジェクトの案内を聞く機会があり、そこではじめて海士、そして聞き書きの存在を知ったことである。その時一番魅力を感じたのが聞き書きであった。島に行ってその島に住む人々の人生についての聞き書きをすることにより、自分の人生を豊かにするための様々なヒントが得られるのではないかと思ったからである。そのため、事前準備で海士について調べてはいたが、実際に海士に着くまで、聞き書きをメインに考えており、あまり海士という土地の魅力について考えていなかった。

しかし、実際に海士に着いてからは海士の自然に魅了されてばかりであった。港なのに海の底の岩場が透き通るほど水の透明度は高く、田んぼの緑が広がり、とても静かだという印象を受けた。その中でも、もっとも印象に残っているのが、アマガエルである。私たちが 3 日目から滞在させていただいた民宿の但馬屋さんの玄関の扉にはいつもアマガエルが張り付いており、夜には周りの田んぼから聞こえてくる鳴き声で眠れないほどであった。そこで、私の家の周りもかつては但馬屋さんと同じようにアマガエルがたくさん住み着いていたことを思い出した。アマガエルはいつも家の門や塀にいて、まるで私の家の守り神のような存在であった。そんなアマガエルも住宅地化が進み、いつしかなくなってしまっていたのである。今まで気づかなかった小さな変化に但馬屋さんで気づかされた。その時私には「アマガエルがいなくなることは小さな変化かもしれないが、大きな意味を持つように思えた。

この気づきから連想されるのが、私の班の語り手さんの保野ひとみさんの言葉である。私たちが「海士が一番輝いていたのはいつだと思いますか」という質問をした際、ひとみさんは「20 年ほど前は島の人がみんな家族のようでよかった。I ターンなどで人口が増えることはいいことだと思うけれどもなんか違う気がする」というような返答をしてくださった。海士の危機を乗り越えるためには発展は必要である。しかし、ひとみさんのおっしゃるように、発展のために変化してしまうことがあるのだ。そのため、言ってしまうと部外者である私たちや I ターンの方々の考え方や行動がどれだけ重要なのかということを実感した。ひとみさんは人とのつながりについて言及していたが、海士には他にも守るべきものがたくさんある。アマガエルもそのひとつなのではないか。アマガエルがいなくなるのがどんな意味を持つのかはわからない。しかし、このような小さな変化が島を守るための大切な気づきとなるのではないかと思う。

今回の『海士伝 3』のテーマは「海士の島守」だ。島を守っている人々の聞き書きを通して、私たちが今、海士で守っていくべきものは何なのかを学び、それを多くの人々に伝えられるよう、編集作業など、熱心に取り組みたい。

再び海士町を訪れたよろこび

和田 恵美

わたしは、今回の実習がおきひやくプロジェクトへの 2 回目の参加となった。正直なところ、わたしは昨年の参加時に経験した編集作業の大変さから、再びこの実習に参加するかどうかギリギリまで迷った。しかし、再び海士町を訪れることで、初参加のときとは違う気づきがたくさんあった。

まずは、海士町に戻ってきたことに対するよろこびである。海士町の風景を懐かしく思えたり、昨年お世話になった海士町のみなさんに再びお会いしたりと、初参加のときには感じなかった親しみを覚えたことや、昨年できたつながりを途絶えさせずに戻ってきたことが素直にうれしかった。

また、今回の実習でのわたしの立場は、学年的にも 2 年生と 4 年生の間の 3 年生であり、経験の多さから言っても初参加者と 3 回目の経験者の間という、真ん中の立場であった。この自分が真ん中の立場であるということからも、新たな気づきを得ることができた。初参加者の後輩に昨年の自分の姿を重ねて、自分の姿からも何かを学んでくれているのだろうか、と感じることもあれば、先輩の姿を見ながら自分がまだまだ未熟であることを感じることもあった。それは、わたしが昨年の自分から少しは成長したことと、まだまだ道半ばであることの証であると思う。そして、それに気づくことのできた自分の変化をうれしく思うと同時に、実習参加を迷っていた自分がそのことをうれしく思えたことが、またうれしかった。

今回、再びこの実習に参加することで、2 回、3 回と実習に参加することで得られることがあるという先輩方や先生方の言葉の意味が、わたしにもわかった気がする。何回も実習に参加することで、自分の成長・レベルアップをはかることができる。それは同時にプレッシャーにもなるが、自分の成長に必要なちょうどよいプレッシャーである。そして、わたしたち学生にとって成長の場であり続けることで、海士町での聞き書きがよりよいものになっていき、このおきひやくプロジェクトの質も磨かれていくのではないかと自らの体験から感じることもできた。

今回の実習では、台風 11 号の影響でスケジュール変更が相次ぎ、またフェリーが欠航したため予定より 1 日長い滞在となった。そんな中でも、スケジュール変更に快く対応してくださったコーディネーターの巡の環の方々や、宿泊先の但馬屋のみなさん、さらに、心配してくださった語り手さんをはじめとする海士町のみなさんに、心から感謝したい。多くの方々に支えられ、期待された実習であることを忘れずに、これからは本の完成に向けて努力し、そして自分を成長させていきたいと思う。